

# 春夏秋冬

## 選手でないトライアスロン

かわなみ  
ゆう  
じ  
河波 裕二

スイム、自転車、ランを基本的に連続して競うスポーツであるトライアスロンに関わって40年近くになります。選手として大会ボランティアとしてまた大会運営の中で審判（現在はTO、テクニカルオフィシャルと呼びます）の資格を取り、現在はTOを中心に活動しています。

私が属する日本トライアスロン連合（JTU）の国内公式審判資格には第3、2、1種があり、私は1種を持ち大会の統括や審判長の資格があります。またJTUは2015年からTOKYO 2020の前に日本人の国際審判（NTO）を国内で養成する事になりました。トライアスロンはシドニー五輪から正式種目になりました。世界組織であるワールドトライアスロン（W.T.）の審判資格は以前は海外で自ら取得するしかありませんでした。やはり下からL1～3の資格があります。

L3は最高峰であるオリンピックの競技の総責任者である技術代表（TD）や審判長（HR）ができます。世界中に30名程度しかいません。TOKYO 2020の時は多くの日本人のL2審判が活躍しました。

私はL1を2016年に取得しました。TOKYOはボランティアでした。頑張つてはいるのですが、なかなか英語が上達しないのでL1のままでいます。いつもアジアからのNTOとのコミュニケーションには苦労しています。

日本での国際大会は例年、横浜ワール



パラトライアスロンの視覚障害者とガイドが二人で乗る自転車

特に横浜大会は世界のトップのトライアスリートとパラトライアスリートが集まるトップレベルのレースであり、昨年はオリンピック選手たちが集まりました。それとリオのパラリンピックから正式種目になったパラトライアスロンも同時開催されました。

ただ、TOの役割はペナルティを取ることではありません。基本的にはいかにフェアかつ安全に円滑に競技を行なえることが仕事です。大会の規模にもよりますが、20名～40名近くのNTOがチームです。主に日程は木曜に顔合わせのミーティング、エリートの選手説明会、金曜が設営、最終ミーティング、土曜日がエリート男女、日曜が一般選手のレースが通例です。女性のNTOが50%近くを占めています。彼女たちは多くがキャリア

ドトライアスロン・パラトライアスロンシリーズ（5月）、アジアカップ大阪城大会（5月）、蒲郡アジア選手権大会（6月）、宮崎ワールドカップ（11月）があります。オリンピックイヤーでした2016、2021、2024年は広島の廿日市（5月）で国内選手の選考レースとしてアジア選手権が開催されました。私は昨年、オリンピック参加が掛かった選手たちが集まる横浜と廿日市に頑張ってNTOで参加しました。宮崎WCは例年参加しています。

パラは普通のトライアスロンと違つて障害によって分類されます。車椅子、上下肢の義手や義足の程度、それと視覚障害もあり、程度によって細かく分けられます。クラスによっては自転車の形状やランの車椅子の形も細かく決められています。スイムから引き揚げるスイムエグジケットというヘルパーや次の競技に移るトランジションの手伝いをするペナルハンドラー、そして視覚障害の選手には一緒に競技するガイド（選手より実力者でメダルも同じにもらえる）などバラならではのサポートがあります。独特のルールがあります。大会前には必ずルールや運営マニュアルの復習が義務付けられます。因みにトライアスロンにはスイム、バイク、ラン、そして次のパートに移るトランジションの各パートや付随する部門にルールがあります。そして違反を犯した選手には主にタイムペナルティが与えられます。

ただ、TOの役割はペナルティを取ることではありません。基本的にはいかにフェアかつ安全に円滑に競技を行なえることが仕事です。大会の規模にもよりますが、20名～40名近くのNTOがチームです。主に日程は木曜に顔合わせのミーティング、エリートの選手説明会、金曜が設営、最終ミーティング、土曜日がエリート男女、日曜が一般選手のレースが通例です。女性のNTOが50%近くを占めています。彼女たちは多くがキャリア

ウーマンで非常に有能で語学も優れた人たちでTDやHR、各パートのチーフによく起用されます。実直で忍耐強い日本女性は海外からの評価が高く指導力もあり感心させられます。

8年近くのNTOの経験の中のエピソードで、宮崎WCでスイム担当で泳いでる選手達の真横に近づきジエットスキーの後部席に乗ってタブレットを構えてチェック用に撮影していた時に突然、浅瀬に乘っかり転覆しました。ウェットスーツを着ていましたが、タブレットはずぶ濡れでした。その時のレースが世界配信され画面より突然フレームアウトしていました。後の笑い話です。

またラン担当の時にマウンテンバイクに乗り男子のレースの先導をしました。2種目終えてのランスタートからトップ集団が最初からラストスパートのようにペースが上がり選手に追いつかれそうになり、スピードがでない自転車を必死に漕いで逃げ続けました。2種目後のトップのスペインの選手は10kmを29分台で走りました。当時は陸上トラックの世界記録が27分台でした。この選手はTOKYOで7位になりました。世界のスピードの凄さをさまざまと見せつけられました。必死に漕ぐ私に観客から選手ではなく私に頑張れと応援され、情けなかつた思い出です。

昨年の横浜大会はパリ出場のポイントを稼ぐ各国の代表権をかけたレースで



横浜大会2024NTO



バイクパートWS

NTOをいつまでやれるかわかりませんが、(年齢制限は特にありません。)体力的に無理と感じれば退いてトライアスロンから引退しようと考えていました。最後にわがままを許してくれた妻と息子には大変感謝しております。

ベルが高く、男子はスイムで70名以上の選手が一塊となって1.5kmを泳ぎ切りバイクも50名以上の1パックとなつて時速50km近くのスピードで40kmを漕ぎ、最後の10kmのランはデッドヒートでした。パリのレースよりコンディションも良く素晴らしいパフォーマンスを目の当たりにする事ができました。

以前より様々なテクノロジーが導入され、より正確なジャッジができるようになりました。昨年の宮崎WCではスイムの違反をチェックする為に上空からドローンで撮影しました。私はスイム担当でボート上から選手のブイ回航を撮影していましたが、フランスの選手がブイの下、水中を潜つて前にでるという違反を確認できず、ドローンの映像を見ていたNTOが確認しレース中に選手にペナルティを取りました。初めての事例でした。今までにやっていた可能性があり、ドローンのお陰で発覚しました。

